第8回国際日本文学研究集会研究発表（1984．11）

島崎藤村の『家』と廉想渉（ヨムサンソプ）の『三代（サムデ）』
—“家”の束縛と崩壊を中心に—

Shimazaki Toson's *Ie* And Yeium Sangsoup's *Samdae*
—Restricition Imposed By And The Breakdown Of 'House'—

盧　　英　姫（Ro Yeong Hee）*

Shimazaki Toson, who wrote many works centering on his own 'House', can be called an autobiograpical writer. Five of the seven long novels he left us are based on his 'House'.In order to qualify Toson's 'House', to which he devoted so much attention, I have tried here to analyse his work *Ie* and, furthermore, have attempted a comparison with *Samdae* by the Korean writer Yeoum Sangsoup.

In *Ie* Toson faithfully describes people suffering from the heavy burden of maintaining their 'House', together with the main characters who either escape or try to escape. Briefly, *Ie* is about an 'House' devoid of meaning for the people of that time. Likewise, in Sangsoup's *Samdae,* 'House' appears as a fetter in the life of the chief characters who find it hard to bear this burden and therefore seek a solution in flight.

Thus *Ie* and *Samdae,* share the theme of burdensome 'House' and that of escape. Another common feature is the fact that the characters suffering from this load have been educated in the

＊　東京大学総合文化研究科博士課程

new style and they take only a critical attitude toward the 'House'. Furthermore, their female partners from an interesting contrast, in so far as they are persons trying to maintain traditional values.

It is conceivable that the common points arise from the common Confucian background. The 'House' of the old Confucian family system usually appears as a heavy burden for people with a new education, and posed delicate problems for people living in the transitional period. Both writers betray their ambivalent feelings between shirking the heavy burden of 'House' and the attempt to maintain it. Their female characters seem to make this contrast even more distinct.

I think a consciously Confucian or moral interpretation of this attitude should be avoided, since their way of thinking may be, despite the strong desire for liberation from 'House', an unconscious expression of "mother-image" of safe repose.

In the end we can say that in *Ie* Toson ignored all Western elements, just as in *Samdae* Yeoum Sangsoup rejected things Western. This is because they thought that the reason for the decay of the Eastern 'House' is Western culture. The two writers thus both believe that Western civilization exercised a harmful influence on 'House'. However modern an education their heroes may receive, they inevitably yearn to return to their traditional 'House'.

This can be regarded as the deepest message of Toson, who insisted on the importance of tradition. Sankichi's will to flee from 'House' but his inability to do so pungently reflects Toson's own inner conflict. Although Toson persisted in demolishing the

concept of 'House', he maintained 'House' on a deeper, unconscious level.

“家”の問題が文学作品の主なテーマとなって表われたのは、洋の東西を問わず稀なことではなく、その歴史もかなり溯れると思われる。日本の場合もその例に漏れず、近代日本文学の中には“家”の問題が多く取り上げられている。

その中でも島崎藤村は他の作家に比ぶべくもないほど自分の家を主題にした作品を描き続け、彼が残した七篇の長編小説の中、五篇は彼の家を素材とした作品であり、しかも、数多い短編及び回想の中でも、自分の家とその周辺から素材を取った作品を見出すことは難しいことではない。

このように、藤村が一生描き続けた“家”の問題というものは何であったろうか。ここでは長年に亘る二大旧家の歴史と、その崩壊過程を克明に描いた作品である、『家』を中心にして、藤村文学においての“家”の問題を調べたいと思う。

一方、同じ文化圏に属する韓国の廉想渉という人の作品の中で、藤村の『家』と同じく、主に家の歴史と、それが崩れる過程を描いた、『三代』を取り上げ、藤村の『家』との対比を試みたい。

ほぼ20年ほど隔てて発表されたこの二つの作品は、共に新聞連載小説であるという偶然の暗合からはじまり、種々な類似点を含んでいるが、同じ儒教文化圏に属する国の“家”の問題であるにも拘らず、なお文化の差異を感じさせるような相違点を見出すこともできる。それ故に、これらの点を両作品の分析を通じて調べたい。

藤村と“家”

先ず、藤村が描き続けた“家”とは何であろうか。関良一が「藤村は近世から近代への日本の運命と、「家」の運命と、そして自分の運命とを、いわば

同一平面上に透視している[注1]」と評している如く、“家”が自分と運命を共にする、一心同体のものであるという意識は、馬籠の名家として約300年[注2]に亘って絶対的な権威をふるっていた、由緒ある生家の生まれであるという意識と共に、いつまでも藤村に付き纏っていたと思われる。かくの如き“家”に対する意識はいつの間にか、まさに個人を拘束するマイナスのイメージを持つ“家”として、作品の中に登場して来ているのである。つまり、“家”を取り扱っている藤村の作品はおおむね否定の立場から“家”を描いていると思われる。

このように“家”が否定的な立場から取り上げられている所以は何であろうか。私はそれを西洋的なものに対してのマイナスイメージであると考えたい。西洋文明と接触するまでは、正しく美しい倫理・道徳として重んじられていたものが、一変して破壊すべき対象として登場するようになったのである。特に自然主義文学の中には、主に“家”の問題を取り扱った作品が多いが、それらは、おおむね自我意識を強調し、“家”はまさにその自我をしばるくびきとして描かれている。

日本の自然主義文学の思想的特徴として、吉田精一は、強烈な自我意識の所有と共に、旧制度の象徴としての“家”に直接対決しようとする態度を挙げているが[注3]、藤村も彼の作品、『家』と『春』の中では、家はまさに重荷として個人を束縛する対象のように描いている。それでは、“家”の重荷とはいったい何であろうか。『家』を中心に調べてみよう。

“家”の重荷

藤村は『家』という題について、「家というのはドメスチック、ライフという意味だ。今頃可い譯語が見當らないから、こういう題にして置くのだ」と自ら説明している。すなわち、『家』では「小泉家」と「橋本家」の二大旧家の家族関係が生き生きと描かれ、旧家は重荷として主人公たちに襲いかかるのである。しかし、藤村が描いた“家”の重荷は大きく分けて、伝統的家族

制度からきたものと、旧家の生まれとして宿命的に負わされている重荷との二つに分けて考えることができると思う。先ず引用文を御覧下さい。

「橋本の姉さんが彼様して居るのと、貴方が斯の旅舎に居るのと、私が又、あの二階で考え込んで居るのと――それが、座敷牢の内に悶いて居た小泉忠寛と、奈何違ひますかサ……吾儕は何処へ行っても、皆な旧い家を背負って歩いてるんぢゃ有りませんか。」

「左様さナ……」

「そいつを私は破壊したいと思ふんです。折があったら、貴方にも言出して見よう見ようと思って居たんです……」(注4)

旧家の生まれである自分たちの運命を述べ、その運命から逃げたい気持を切に語ってるところである。しかし、例文に出ているような旧家の人たちを凝視し続ける、藤村の分身である三吉が思っている重荷とは、他の兄弟が有している家長意識及び虚栄とは質を異にし、主に実生活に繋がる経済の重荷であり、それは、まさに儒教的家族制度の絆がもたらしたものともいえよう。

ところが、橋本家の世継ぎ人として生まれた橋本家の正太が背負っている重荷は、三吉が持っている重荷とは違う。すなわち、木曽福島で代々薬種業を経営している橋本家の一人息子正太は、自分の希望とは異なる道を歩まされ、橋本家を継ぐ人としての重荷をになっている人物である。

隠居の眼は正太に向って特別な意味を語った。「若旦那様――お前さまは唯の若いものの気で居ると違ふぞなし……お前さまを頼りにする者が多勢あるぞなし……行く行くはお前様の厄介に成らうと思って、斯うして働けるだけ働いて居る老人もここに一人居るぞなし……」とその無智な眼が言った。

正太は一種の矜持を感じた。同時に、斯の隠居にまで拝むやうな眼で見られる自分の身を煩く思った。(注5)

これは正太が隠居の眼から読み取った言葉であるが、それは唯の人正太に対しての言葉ではなく、まさに橋本家を継ぐ未来の主人公正太に向っていわれた言葉である。こうして若い正太に対してまで隠居の眼は旧家の重荷を語

りかけ、自分の将来までを頼むかのごとく語っている。「唯の若い人ではなく旧家を継ぐ人である」という意識は、一個人としてより旧家を代表する人であってほしいという、望みがこめられている。

正太は自分が行きたい道を挫かれ、ただの一個人ではなく、旧家の世継人としての自分に息詰まるような欝陶しさを感じているが、このように正太を悩ませた旧家の重苦しさは、当時、旧家の長男として生まれた、たいていの人が程度の差こそあれ感じていたことであったろう。当時『家』を『読売新聞』に掲載するように推薦してくれた正宗白鳥[注6]は『家』を読んだ感想を次のように述べている。

> 読み終ると共に、これは量に於いても質に於いても、明治以来の大作の一つであると断定せざるを得なかった。……私はこの一巻を机上に置いて、読んだあとを回顧したが、いろいろな問題が自から私の頭に浮んだ。私自身の過去半生を、この一巻に現わされている人生に見つけようとしたりした。[注7]

岡山県の旧家に生まれ、自身も家の重荷の中で苦しむ人々を描いた短篇『何処へ』を発表した白鳥が、藤村の『家』を読み、自分の半生を見つけようとさえしたのは、同じ旧家の生まれとして育ち、且つ同時代を生きてきた人として当然のこととでもいえるのではなかろうか。このように読者があたかも自分のことであるかのように、なまなましく感じられる「家の重荷」の中で主人公たちはそれを堪え難く感じ、逃れたがっているのである。

重荷からの脱出

『家』で三吉と正太が古い家族制度と旧家の重荷の中で苦しんでいたのは、既に述べた通りであるが、『家』で二大旧家の男たちは既に若い時家出をした経験がある人物、もしくは、いつも家出を図っている人物として描かれているのはなぜだろうか。

もう少し詳しく調べてみると、橋本家の達雄は名古屋に出奔、終には満州まで脱出するし、小泉家の長男実も落ちぶれて満州に行くことになり、その

弟森彦も若い時から家を出て旅舎の中で暮らし、三番目の宗蔵も少年時代から流浪を続ける。

一方橋本家の一人息子正太も常に“家”の重苦しさから逃れたがり、終には旧家を後にして東京へ上京する。ところで、正太は自分の家出までも旧家に生まれたものとして止むを得なかったものと思い、叔父三吉と次のような言葉を交わす。

「しかし、叔父さん、私の家を御覧なさい——不思議なことには、代々若い時に家を飛出して居ますよ。第一、祖父さんが左様ですし——阿父が左様です——」

「　へえ、君の父親さんの若い時も、矢張許諾を得ないで修行に飛出した方かねえ。」

「私だっても左様でせう——放縦な血が流れて居るんですネ。」(注8)

歴代旧家の生まれである祖父・父・そして三代目の正太自身までも、今家を出ることによって旧家の格式が強制する。“血の流れ”を否定したいと思っているが、旧家の人々の家出、その中に“放縦な血の流れ”を感じる正太は、自分の力ではどうにもならない宿命としての“家”という存在を思い起こされる。

つまり、“家”が重荷としてすべての人々にのしかかり、二大旧家の人たちは三吉を除いてことごとく家を飛び出している。ところで三吉も“家”の重荷を感じ、それからの脱出として旅行を思い立つのは一種の家出ともいえよう。

ところで“家”の問題を扱った数多い作品の中では近代自我の発展と共に、家からの脱出を題材とした作品も少なくない。例えば、藤村が親しみをもって読んだと回想している、(注9)ロシアの作家ツルゲーネフの『父と子』がそれであり、ドイツのシュミットボンの『街の子』また、中国の巴金の『家』などの作品が、父と子が代表する世代の葛藤を描いており、近くは日本の志賀直哉の『和解』、『大津順吉』なども父と子の対立問題をテーマにしている。

しかし、藤村の『家』はこれらの作品とは、その出奔する原因においてい

ささかその性質を異にする。というのも、藤村の場合には、その家出の原因を“放縦な血の流れ”、すなわち代々の血統から継がれた、まさに止むを得ないものとして描いている。これは藤村が描いた“家”が持っている大きな特徴ともいえようし、自然主義文学者としての藤村の影が色濃く表われている点であろう。

『三代』に見られる“家”からの脱出への意志

『三代』は一九三一年、『朝鮮日報』に発表された作品で、『三代』という題が示唆している如く、祖父、父、子の生活姿勢を見せつつ、韓国の近代社会の深層構造を解剖的に示している作品である。『三代』には、名前が出る人物だけでも三十一人もいるくらい登場人物が多いが、主な主人公たちは、“家”の重圧の中で苦しんでいる。

先ず、『三代』に描かれている旧家について考えてみよう。

『三代』で旧韓末世代の典型的な地主である祖父は、当時代の新しい思潮には背を向けて伝統社会の儀式だけを固守しようとし、そのような祖父が舵を取っている家の中では若い人たちはまさに“家”の重圧をひしひしと感じている。父相勲(サンフン)が祖父との葛藤で家を追い出され、その結果“家”の重荷は自然に孫である徳基(トッキ)の肩に負わさせるのである。

当時二十三歳で日本の京都旧制三高に留学中である徳基は、卒業の一ヶ月前に祖父の危篤の報を受けて急據国へ帰り、祖父は孫を呼び寄せて金庫の鍵を預けようとする。次の引用は祖父と留学先から帰ってきた孫が取り交す言葉である。

「私が今から預かる必要がありますか。私は祖父(おじいさん)の病気がよくなれば、またすぐに行かなくてはならないし。それに父を差し置いて私がどうして預かれますか。」徳基としては道理からしてもそうだったが、勉強を放り出して、所帯持ちとして落ち着くことはできないことであった。

「また行くなんて……駄目じゃ。わしが生き返るとしても、もう行くことはできんぞ。つべこべいわずに、わしの言った通りにするだけのこ

とじゃ。」と祖父は絶対厳命であった。

「やりかけの勉強を放り出すことができますか。もうひと月さえすれば卒業ですし。」「勉強が大事か、家のことが大事か、それもお前がいなくても構わぬことならともかく、わしさえ眼をつぶってしまえば、この家がどうなるか。お前もいくらまだ若いといっても、卒業も何も全部諦めて、その鍵を預からなければならん。(注10)(筆者訳)

無理遣りに旧家の所帯を押しつけようと思う祖父の気持がはっきりと表われでる文章であろう。「勉強が大事か、家のことが大事か」と問い質し、「卒業も何も全部諦めてその鍵を預からなければならん」と、いかにも押し付けがましい態度でいう祖父の言葉は、旧家の繁栄のため身を尽くした人としての実感を持って孫に言いかけるのであり、生涯を“家”のために尽くした祖父の眼には、“家”の保持と比べるならば、学校の卒業などはとるにたらぬことだという意識しかなかったのである。

祖先崇拝を意味する「祠堂」と、経済的な家督権を意味する「鍵」、この二つを守らせるため、「今まで勉強させて来た」という、祖父の露骨ないいまわしには、個人徳基よりは、趙氏一家の代を立派に継ぐべき重い責任を負っている世継ぎとしての徳基の存在が浮んでくるのである。

祖父から押し付けられた「鍵」、それは富豪趙氏一家を象徴する金庫を開ける力を示しているが、一方では徳基の生涯を金庫の中に閉じ込めようとする旧家の重荷を暗示しているのである。自ら「監房の看守」に譬えた徳基の生涯、彼は自分に履い被さっているその息苦しさの中から常に逃げようと思っているが、終に逃げられずに、祖父の死後はその遺言に従い旧家を継ぎ、その旧家の重苦しさに喘ぐである。

ところが、『三代』の場合も、藤村の『家』と同じく、若い男主人公たち、すなわち、趙氏家の父相勲(サンフン)、そしてその息子徳基(トッキ)、また徳基の友人である金炳華(キムビョンウア)は家を重荷として見做し、常に自分が処している“家”から脱出への意志を有しているが、数多い登場人物の中でも、特に、彼らのみはすでにアメリカや日本などに留学した経験がある人物として設定されているのは興味深

い点であろう。

『家』と『三代』に見られる類似点

今まで藤村の『家』と廉想渉の『三代』に描かれている“家”について調べてきた。今まで見たように、この二つの作品は、近代的な新興世代の出現による、“家”の崩壊過程、またその没落の様子を主な主題として設定している共通点を持ち、両国の風土的な特色と、時代的な背景を異にしながらも、二つの作品には主題や人物設定においての類型を感じさせるところが多い。

そしてここで思われるのは、約20年後の作品である『三代』に及ぼした『家』の影響であろう。(注11) 想渉の年譜で紹介したように、想渉が最初に渡日した当時の日本文壇では、自然主義文学が盛んであった時代であり、藤村の『家』も『読売新聞』と『中央公論』で連載を終え、すでに『緑蔭叢書』第三篇として出版されていた時期であり、当時十六歳の文学青年であった彼が、評判になっていた『家』を読んだであろうと推測するのも不自然ではないだろう。

それに東洋人としての生活感情と家族制度及び、倫理意識などが類似している両国の“家”を扱った例の二つの作品を比べるならば共通点が多く見出される。特に、旧家の重荷から脱しようと思う「正太」と「徳基」の場合はまさに同じである。しかし、彼らの如く、旧家の世継ぎものとして苦悩している主人公という設定は、ある意味では実際の影響関係以前の問題とも思われる。

つまり、私はこうした類似点を両国がこの時代に共通して背負っていた、まさに過渡期にあった家族制度という、社会の制度的類似点からきたものであると思う。すなわち、文化圏を中心に考えてみると、日本と韓国は、中国と共に儒教文化圏に属するものであり、同じ儒教文化圏においての“家”の心理的、または倫理的特質は、儒教のイデオロギーをその支柱とするものと思われるし、そのような観点から考えると、“家”の内部の問題に根強く現われてくる伝統的でまた儒教的倫理が、『家』と『三代』に描かれている精神的、心理的な類似点の基盤でもあると思われる。

両作品の中で“家”は、主人公たちに重荷を持たせる存在として描かれ、それから逃げようと思う主人公たちの意志がまざまざと描かれている。勿論、想渉の『三代』みたいに、重荷が無理遣りに押し付けられたか、または、藤村の『家』のように旧家の生れの人として、宿命的に負わされたかの差異が生じ、その上、重荷を持たせる家族制度、並びに、伝統に対する文化の差異ははっきり描かれているものの、“家”に対する主人公たちの否定的な考え方は同じであると思われる。

しかし、両作品の中で、“家”に対して否定的立場に立っている登場人物は、ことごとく新しい文物に接した若い男の主人公のみであるのは、単に偶然の一致といえるものであろうか。『家』の正太と三吉、『三代』の相勲、徳基、炳華がその類に属する人である。その人たちは若い時、国を離れて東京へ留学した人や、またはアメリカへ留学した経験がある人である。『家』と『三代』には数多い人が登場するが、特に、彼らのみが“家”の重荷を切実に感じ、それから逃れたがる所以は何であろうか。

先にも触れたように、ここでは西洋文物が東洋の“家”に及ぼした影響が想像できよう。木曽の田舎から東京へ出た人物、またはソウルからアメリカと京都に出た人物は、彼らが当時までの自分の祖先と同じく、ただ旧家を継ぐという生活以外の、自分たちの生活の可能性を一度は見た人たちなのである。このように人より一歩先んじて西洋文物に触れ、自我に目覚めつつあった新知識人たちにとって、その“家”は堪え難いものとして描かれているのである。

ところで、例の二つの作品の中で、新しい教育を受けた男性たちは、“家”からの脱出への意志に燃え、絶えずそれを図っていながらも、それとは反対に“家”を守りたいという、作家の無意識的な意志をも見出すことができると思う。すなわち、藤村の『家』の中で「家などは奈何でもいい」と平常語る正太でありながらも、“家”が崩れようとすると力を傾けて“家”のために勤め、一方、『三代』でも、徳基は無理遣りに“家”を受け継ぐこととなり、それから逃げたい意志を有しつつ、結局は“家”のために力を尽くすのであ

る。

このように、二つの作品の中では、“家”から逃れたいという気持を常に抱きつつも、一方ではそれにも増して、“家”を守りたいという作家の心情が描かれている。つまり、意識の面では、儒教的倫理及びそれによる道徳にとられることを避けたいと思い、常に“家”からの解放を強く望みつつも、むしろ、それが故に無意識の世界では、それとは逆に、いつも安らぎと休息を与える母なるイメージとしての“家”を守りたいと思う、作家たちのアンビヴァレントな感情をも窺うことができるのである。

註

(1) 関良一　“家”『島崎藤村必携』(学燈社、1967年) 133ページ

(2) 「島崎家」の元祖七郎左衛門重通が馬籠に定住したのは、永祿元年1558年であるという (山室静編、『島崎藤村』17ページ参照)

(3) 吉田精一は『自然主義研究下巻』39ページの中で、日本自然主義の特色を(1)、強烈な自我意識、(2)、創作上の態度、方法、目的として“自然への肉迫”、(3)、主に、彼ら自然主義作家たちの直接対決の対象としての“家”の問題、(4)、人生、社会に対する観照的、傍観的態度を上げている。

(4) 『島崎藤村全集』第4巻 (筑摩書房、1981年) 231ページ。

(5) 上掲書、19ページ。

(6) 藤村は「三つの長篇を書いた時」(『市井にありて』所収) の中で、『家』は正宗白鳥の推薦で『読売新聞』に連載されるようになったと回想している。

(7) 『島崎藤村集』第1巻 (筑摩書房、1967年) 436～437ページ。

(8) 『島崎藤村全集』第4巻 (筑摩書房、1981年) 133ページ。

(9) 藤村は『飯倉だより』所収の「ルウヂンとバザロフ」の中で『父と子』について評している。

(10) 廉想渉『三代』(韓国ソウル東西出版社、1978年) 365ページ。

(11) 廉想渉全集がまだ未刊であり、彼の藏書目録も知られていないため、まだ確かめることはできない。

(参考1)

廉想渉年譜

1897年8月30日、廉圭桓(キュハン)の8兄弟のうち3番目の子としてソウルに生まれる。

本名は、尚燮(サンソブ)、筆名は想渉、雅号霄月(ゼウオル)、横歩、字周相、

1902年、祖父から漢字を習い始め、『千字文』・『童蒙先習』・『小學』・『論語』などを習う。

1907年、官立師範附属小学校に入学。

1909年、私立普通小学校に転校。

1910年、普成中学校入学。

1912年、1人で日本へ渡り、日本語を学ぶ。東京麻布中学2年に編入、途中で青山学院へ移り、初めて浸禮教の洗禮を受ける。

1915年、京都府立第2中学校へ編入。

1918年、慶應大学史学科を志望して予科に入学。

1919年、大阪の天王寺公園で独立運動事件のため、大阪地方法院未決囚として5カ月の監獄生活を送り、学業は中断される。

1920年、『東亜日報』の創刊と同時に政治部の記者となる。7月同人誌『廃墟』を出刊、10月、『東亜日報』を辞職し、定州の、五山中学校の教師になる。

1921年、「標本室の雨蛙」を『開闢』に3回に亘って連載する。

1922年、短編「闇夜」を発表、『東明』の編輯長になる。初めて長編「基地」を発表。

1923年、「死とその蔭」「ひまわり」を発表。

1924年、「金の指輪」、8月には初の短編集『牽牛花』を出刊。

1925年、『東明』が『時代日報』に変わると同時に同新聞の社会部長になる。

1926年、日本へ渡り、日本文壇への進出を図る。「悪夢」、「初恋」、「遺書」を発表。

1927年、日本に滞在中、「南忠緒」・「未解決」・「二つの出発」などを発表。

1928年、2年間の日本生活を終えて帰国、長編「二人」を『毎日申報』に連載。

1929年、5月、義城金氏英玉(ヨンオク)と結婚、10月から「狂奔」を『朝鮮日報』に連載。

1930年、「三人の家族」「池先生」を発表。

1931年、1月、「三代」を『朝鮮日報』に連載、11月からは「無花果」を『毎日申報』に発表。

1932年、「白鳩」を『朝鮮中央日報』に連載。

1934年、『毎日申報』に入社、2月「牡丹の咲くころ」を『毎日申報』に連載。

1936年、5月、「不連続線」を『毎日申報』に連載、短編、「失職」を最後に、日帝時代の作家活動を終える。

1937年、『満鮮日報』の主筆兼編集局長となり、満州へ移り、1945年までそこで暮らす。

1946年、ソウルに帰る。9日、『京郷新聞』創刊と同時に、編集局長になる。

1947年、『京郷新聞』を辞退し、城均館大学講師になる。
1948年、「三・八線」「解放の息子」「謀略」「離合」などを発表。
1949年、「二つの破産」、「一代の遺業」を発表する。
1950年、「暖流」と「立夏の節」を『朝鮮日報』と『新天地』に連載、海軍へ入隊、政訓將校として勤める。
1951年、海軍生活を続け、「解放の朝」「春」「艶書」「血」などを発表。
1952年、「紅焔」「驟雨」「新しい響き」の3部作を執筆。
1953年、『驟雨』出版、7月休戦により海軍を止めて上京。
1954年、ソウル市文化賞受賞、ソラボル芸術大学長に就任、芸術院終身会員となる。
1955年、「地平線」を『現代文学』に連載。
1956年、自由文学賞、受賞、「死線」を『自由世界』に連載。
1957年、芸術院功労賞を貰う。「友情」「帰った母」などを発表。
1958年、「代を継いで」を『自由公論』に連載。
1959年、「結婚後」「三角遊戯」を発表。
1960年、『一代の遺業』を刊行、「十代前後」、「二十代に入って」を発表。
1961年、10月「疑妻症」を終わりとして病気で絶筆。
1962年、三・一文化賞、大韓民國文化勲章を貰う。
1963年、3月14日、ソウル城北区城北洞145の52号で死亡。

この年譜は、金鐘均の『廉想渉の生涯と文学』(1981年、ソウル博英社出版)から　筆者が抜粋して翻訳したものであることを記して置く。

(参考2)

『三代』のあらすじ

『三代』は1930年代ソウルの富豪趙氏一家を舞台としている。

先ず、趙氏一家の構成員を紹介してみると、まだ、儒教の倫理を強く主張する祖父と、その息子相勲、そして孫の徳基が三代を成している。祖父は元の夫人に死なれて再婚し、その庶祖母の身から女の子が一人生まれた。相勲は富豪の父のお陰で早くからアメリカへ留学した人で、帰朝してからキリスト教関係の教育事業に手を出しているが、キリスト教信者であるからこそ、父から嫌われる。また、彼は独立運動をする愛国志士の生活を助けてやるうちに、その娘のキョンエと親しくなり、終には愛人の関係にまで至り、キョンエは女の子を生むことになるが、相勲は自分の社会的面目を立てるために知らぬふりをし、キョンエからだんだん遠のいていく。

一方、孫の徳基は京都三高に在学中の二十三歳の学生であるが、祖父の命令に従

い、早婚している。徳基は冬休中ソウルに帰宅していたが、休みが終り、いよいよ京都へ発つ前の日、友人であり、社会運動をする炳華の訪問を受け、彼に誘われて酒場に行くが、そこで昔小学校の同級生であり、父の愛人でもあるキョンエに偶然に会いギョッとする。

その翌日、祖父は孫の徳基に、あさっての曽祖父の祭祀を祭ってから京都へ行くように命令し、徳基もそれに従うことにする。祖父は息子の相勲が基督教信者であるから、祖先の祭祀を祭らないことに堪え難い不満を抱き、別居している息子が訪れても、話相手にもならず嫌っている。

また、祖父はお金の力で両班の族譜を買い入れ、その族譜を新しく作るために巨額の資金を投資、しかも、その族譜の先考のお墓を大きく作る。祖父は自分の祖先から受け継いだ千両で、死ぬ際には2700石、現金1300円あまり、その上3軒の家と精米所を残した人で、自分が使うお金は、自分の父から譲られた千両から使うものではなく、自分が儲けたものであるから惜しくもないし、先祖に対しても堂堂たるものであると思っている。ところが相勲は、祖父のこのような金使いに対して不満を抱き、それを祖父に話すが、祖父は受けいれる筈がなく、却って、親子の衝突がますます激しくなるのである。

さて、祖父は祭祀の翌日の朝、台石の上で滑り落ちて腰を病むようになる。老人のせいであろうか、祖父の病気はなかなか回復しない。ところが、徳基は学校のことも心配になり留学先である京都へ立つ。

徳基が京都へ立った後、祖父の病気は回復どころかだんだん悪くなるばかりである。祖父は自分の病気のことをもう知っていたのであろうか、京都にいる徳基を呼び寄せて、遺産を相続させようと思い、電報を打つように頼んだが、徳基はなかなか来ない。庶祖母を取りまいている連中が、徳基が来る前に祖父が死んだら、遺産相続を自分たちの気ままにやろうと思って電報を打つことを伸ばしたからである。何度も電報を打ったというのに徳基が来ないので、不思議に思い、かつ心配した人たちは、徳基の妹に直接電報を打つことを頼み、その電報をもらった孫の徳基は、期末試験を後にして急きょ帰ってくる。

祖父は帰ってきた孫に鍵束を預けようとするが、徳基はまだ勉強中であり、父もいるから自分が家を受け持つことは厭であると弁明をいうが、祖父は〈勉強が大事か、家のことが大事か〉と質し、〈その鍵一つにお前の運命がかかっている。お前は、その鍵を守り、また祠堂を守るべきである。〉と非常な剣幕である。徳基はまだ若い自分におしつけられた鍵を見て歎き自分を監房の看守にたとえている。

ところが、祖父の病気はますます悪化し、入院して手術を受けることになるが、その甲斐もなくこの世を去る。趙氏の後継者は祖父の意向どおり、事実上三代目の

徳基に決ったのである。徳基は趙氏一家の後継者として、父相勲よりも多い巨額の遺産を貰うことになり、祖父の死後の後始末に力を尽くしていながらも、遺産は自分の何分の一かだけしか貰わなかったが自由の身である父の位置を羨しがるのである。

討議要旨

伊東氏から『家』は従来、自然主義の立場から家の重圧を扱ったものとされているが、『家』と『アンナ・カレーニナ』を比較した論考で、『家』もニューライフを目指していることを指摘したものがあり、私もそのように思うが、『三代』にも新らしい生活への希望も書かれているか、と質問があり、

発表者から、『三代』にも最後の所に新らしい生活への意志が書かれているように私は考えている、と回答があった。